

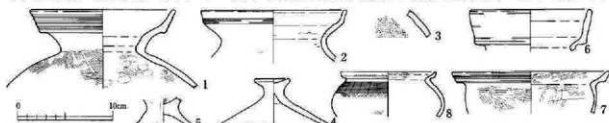
第34図 2区E501出土遺物実測図2(5:縮尺1/6, 6~12:縮尺1/10, 13:縮尺1/4)

蓋1点、脚台1点を図示する(第35図、第17表)。壺(1・2・6)はいずれも有段口縁を呈し、口縁部外面に擬凹線を施す。鉢は、外傾する有段口縁をもつ在地系のもの(7)と、外面下端に刻みを施す受口状口縁をもち、胴部上半は直線文と刺突列点文で加飾する近江系に属するもの(8)がある。胴部(3)は外面にヘラ描き文様がみられる。蓋(4)と脚台(5)はハの字状にひろく器形を呈する。

### 3 遺構外出土遺物

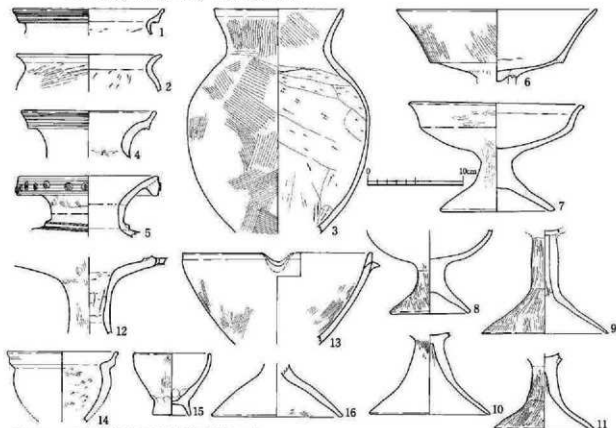
僅かに古墳時代後期の須恵器が出土するが、図化できたのは全て弥生土器で、壺・壺・高坏・裝飾器台・鉢がある(第36図、第17表)。弥生時代後期後半から末にかけての所産である。在地系の土器が大半

を占めるが外来系とみられるものもある。1点はくの字状口縁の甕(2)で、胴部外面にタタキ調整を施す。もう1点は東海系と考えられる広口壺(5)で、口縁端部に断面三角形の粘土帯を貼り付けて拡張した面を直線文と円形浮文で飾り、その下位に直線文を施す。頸部には突帯を貼り付けて刻みを巡らす。



第35図 2区遺構出土遺物実測図(縮尺1/4)

1~5:SK05, 6:SK05・SP49, 7:SP45, 8:SD05



第36図 2区遺構外出土遺物実測図(縮尺1/4)

### 第3節 3区

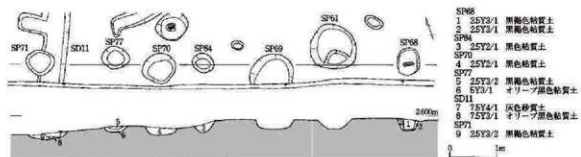
遺構は、柱穴1列、柱穴50基、溝5条、自然流路1条を検出した。1・2区の状況と併せて考えれば、3区の北半を占める自然流路SR01が古墳時代後期以降の集落の北限であったと推定される。

#### 1 柱穴列

柱穴列1(第37・38図) B15からD15グリッドにかけて位置する。直線上に4基の柱穴が並ぶもので、全長7.76m、柱間寸法は2.40~2.80mを測る。軸はN68°Wである。柱穴は楕円形または隅丸方形を呈し、長軸0.55~0.64m、短軸0.52~0.90m、深さ0.17~0.26mを測る。SP68は底面に礎板を設置しており、礎板は長辺0.26m、短辺0.06m、厚さ0.01mを測る。柱穴4基とも弥生土器が少量出土し、SP70では平安時代の土師器・皿類も出土しているが図示できるものはない。

出土遺物から考えれば、平安時代に帰属する可能性が高い。



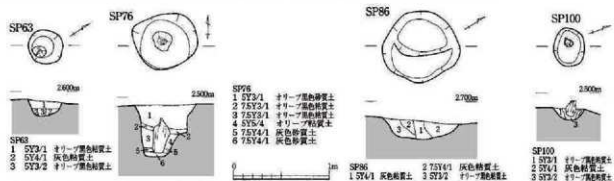


第38図 3区柱穴列1実測図(縮尺1/80)

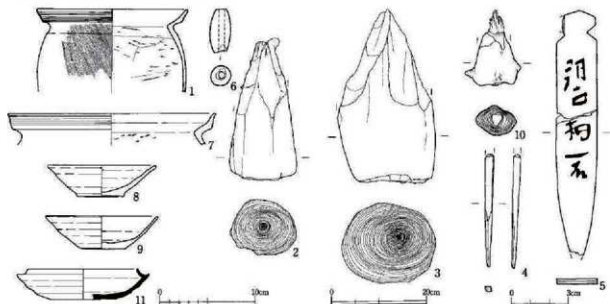
土錘(6)は管状土錘である。加工木(4)は断面方形で棒状を呈し、下半部は2方向から加工して尖らせる。上部は欠損する。木筒(5)は付札木筒で、「□□初一石」と墨書される。頭部は山形に整形され、上端の左右に切り込みを入れて下端を尖らせている。板目材である。柱(2・3・10)は芯材材である。

溝や自然流路の出土遺物には、弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器、古墳時代後期の土師器・須恵器、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器、土錘、石器・石製品、木製品がある(第42・43図、第17・18・20・21表)。

弥生土器は甕・壺・高坏・器台・裝飾器台・蓋・小型土器などがあり、後期後半を主体とする。古墳時代前期に比定されるのは土師器の壺(5)で、くの字状口縁に球形の胴部をもつ。



第39図 3区柱穴実測図(縮尺1/40)



第40図 3区土坑・柱穴出土遺物実測図(1・6~9・11:縮尺1/4, 2・3・10:縮尺1/8, 4・5:縮尺1/2)

古墳時代後期の須恵器坏H(12)と高坏(2)は、TK209からTK217型式期に比定される。甕形土製品の基部(29)も同時期と考えられる。30は甕形土製品の口縁部と推測され、時期がやや下る可能性がある。

平安時代の遺物は多様である。土師器は底部外面に回転糸切り痕が残る。碗は10世紀代のものが主で、器形は口縁部付近で外反するもの(14・33・34・36・38)と口縁部が内湾気味にのびるもの(6・35・37)がある。法量が小さいもの(14)がやや新しいと考えられ、10世紀末から11世紀初頭に比定される。皿は口縁部が内湾気味に立ち上がる器形で、器壁がほぼ同じ厚さで推移するもの(15)と、口縁部に向かって先細りとなるもの(10)がある。前者は10世紀末から11世紀初頭、平高台をもつ後者は11世紀代と考えられる。須恵器は2時期あり、坏B(3)・坏(39)・甕(43)は9世紀に比定される。坏は箱形の器形を呈する。底部外面に回転糸切り痕を有する碗(7・13・40~42)は10世紀に比定される。口縁部付近で外反する器形(7・13・41)と直線的にひらく器形(40・42)があり、このうち2点(41・42)は平高台の底部をもつ。灰釉陶器は全て貼り付け高台を有し、三角高台(46)と、稜が不鮮明な三日月高台(45・47)がある。耳皿は1点(11)のみの出土で、9世紀末から10世紀前半に比定される。碗と皿は折戸53号窯式、10世紀前半に比定される。碗は口縁部を丸く仕上げるもの(44)と、やや先細りとなるもの(45)がある。後者の高台内には「乃井村」の墨書が確認できる。施釉はハケ塗り(44・45)、浸け掛け(46)がある。皿(47)は高台内に4字以上の墨書があったと推測される。

石器・石製品は3点を図示する。敲石(48)は礫の1端部に敲打痕をもつ。卵型の円礫が短軸方向に垂直に割りとられ、反対側の自然面端部を使用している。石錘(49)は薄手の自然礫を利用し、それぞれ別面からの数回の打撃によって両端部に挟入部を作る。挟入部の磨耗はほとんど認められない。筋砥石(50)は細粒の砂岩製で、図右側面が楕状になる。上半部は欠損している。筋状部は、裏面側の立ち上がりが急で僅かに弧を描き、表面側の上場稜線は不明瞭である。表裏面、右下角部分にも使用痕跡がある。

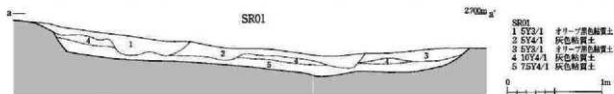
木製品は横槿・木筒・曲物・加工木を図示する。横槿(51)は芯持材で柄部が長さ約9cm、身部は径26cmを測る。木筒(52)は柾目材で2文字墨書されるが内容は不明である。上下端と左側縁を欠損する。木筒(53)は付礼木筒で、「乃間田」と墨書される。上端の左右に切り込みを入れ、下端を尖らせている。板目材である。曲物(54~56)は54のみに側板が遺存する。55は幅2cm程の加工痕がある。加工木(8・57)は棒状で、57は上部を欠損する。ともに片側先端を尖らせる。

### 3 遺構外出土遺物

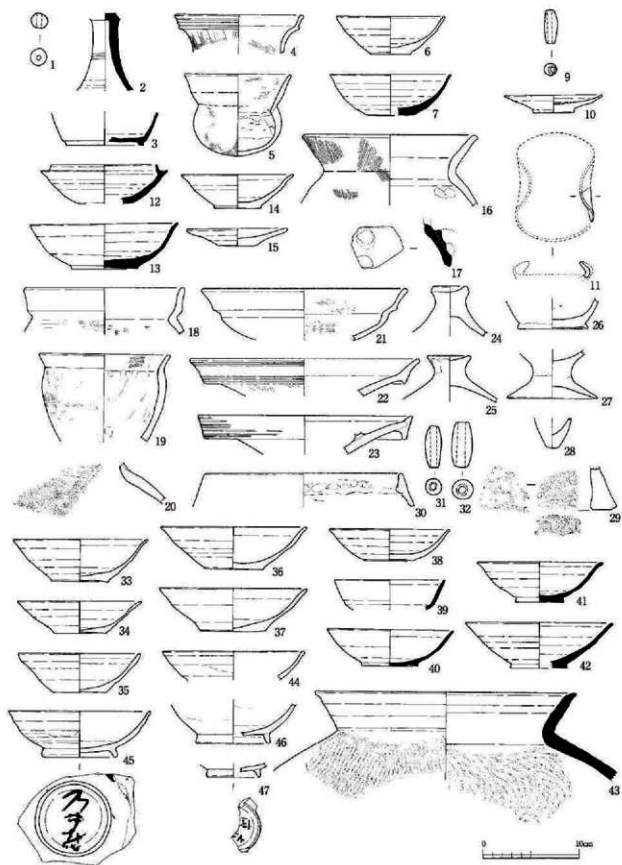
弥生土器、古墳時代後期の須恵器、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・青磁・白磁、土錘、石器、木製品が出土している(第44図、第17・18・20・21表)。

弥生土器(1~3)は後期後半を主体とする。甕(1)、把手付無頸壺(2)、鉢(3)を図示する。須恵器(4~8)はTK209型式期に相当し、6世紀末から7世紀初頭の時期のものと考えられる。

平安時代の遺物は多種多様である。土師器は碗(11~17)・鍋(18)・羽釜(19)がある。碗は10世紀代のものが中心で、内面に漆を塗布するもの(16)もみられる。須恵器は、箱形を呈する坏B(20)が9世紀中頃、三角高台を付す碗(21)が9世紀末から10世紀前半に比定される。灰釉陶器は碗(22・23・24)と皿(25)

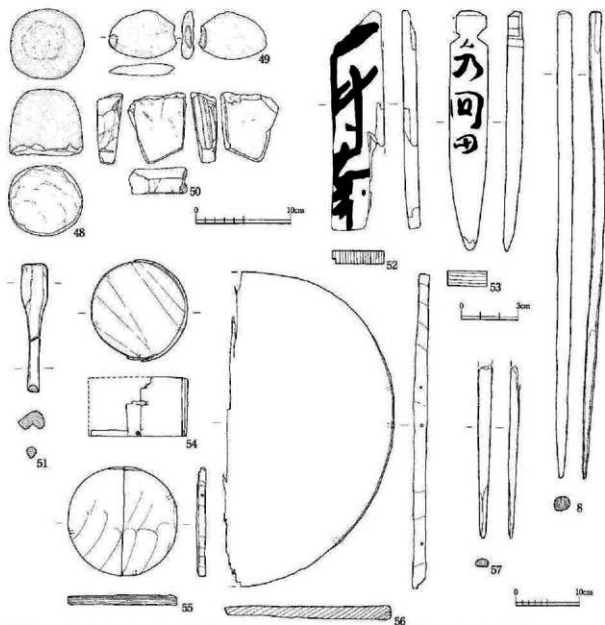


第41図 3区SR01土層図(縮尺1/40)



第42图 3区清·自然流路出土遗物实测图(缩尺1/4)

1: SD09, 2·3: SD11, 4~7: SD13, 9~11: SD14, 12~15: SD15, 16·17: SD24, 18~47: SR01



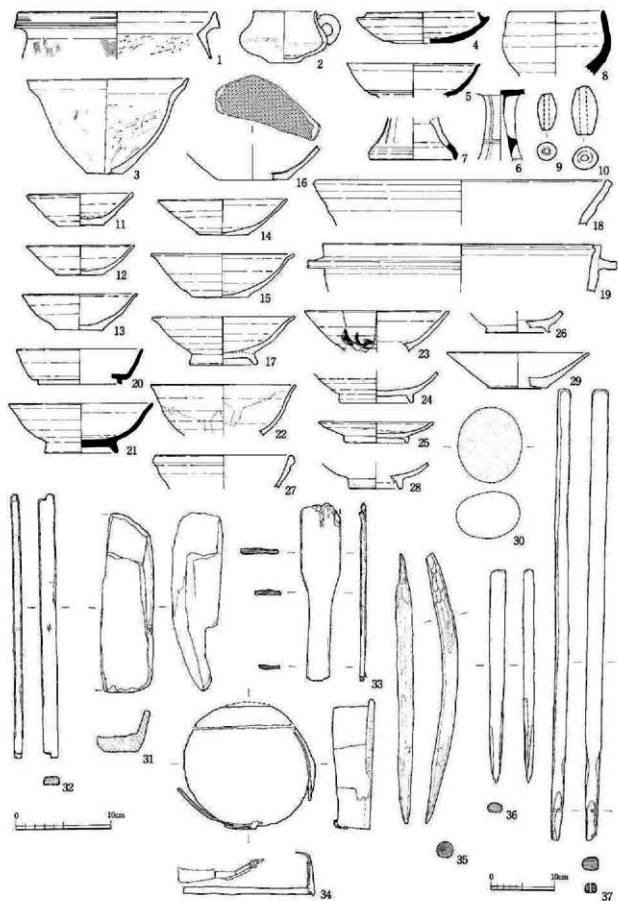
第43図 3 KSR01・SD13出土遺物実測図(48~50: 縮尺1/4, 51~56: 縮尺1/2, 8・57: 縮尺1/6)  
48~57: SR01, 8: SD13

がある。10世紀前半のものが主体と考えられる。施釉方法はハケ塗り(22)と浸け掛け(24・25)がある。緑釉陶器の碗(26)は硬質の焼成で、濃緑色釉を全面に施す。白磁(27・28)は白磁碗Ⅲ類<sup>(2)</sup>で、口縁部に鋭角で小さな玉縁を持つもの(27)と、高台外面を直に内面を斜めに削り出すもの(28)がある。11世紀後半から12世紀前半に比定される。青磁(29)は越州窯系青磁碗Ⅰ-1類<sup>(2)</sup>である。体部から口縁部まで直線的に立ち上がり、外面に目跡が残る蛇の目高台をもつ。8世紀中頃から9世紀末の可能性が高い。

磨石(30)は、片面のやや狭い範囲にのみ磨減がみられる。

木製品は、舟形状木製品、杓子状木製品、曲物、加工木、柄杓柄を图示する。舟形状木製品(31)は半分程を欠損し、側面が強く立ち上がった臺取り状を呈す。部材(32)は断面長方形の板目材で、両端部を切り欠き、中央部に穿孔する。杓子状木製品(33)は厚さ0.6cmと薄く、上部は幅が4cmである。加工木(35)は芯持材で、湾曲して棒状を呈す。全面に丁寧な加工が施され、上下端部を尖らせる。加工木(36)は断面楕円形の棒状で、下部を尖らせる。柄杓柄(37)は結合用の孔が2カ所ある。

第3期 3区



第44图 3区遺構外出土遺物実測図(1~30:縮尺1/4, 31~37:縮尺1/6) +



## 第4節 4区(第1面)

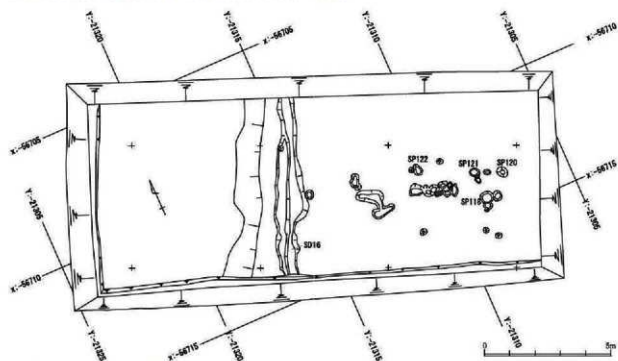
前述のように7層上面で遺構を検出しており、これを第1面として記述する。調査区の東側では柱穴30基、溝1条などを検出したが、湧水もあって西側では遺構を確認できなかった。検出できた遺構は少なく、しみ状のものが多い。遺跡の縁辺部に当たると考えられる。

なお、本調査区の北側、市道木崎東西線に隣接する水路部分で立会調査を行っているが、水路埋設時に削平を受けているため第1面を確認することはできなかった。

## 1 遺構出土遺物

平安時代の遺物が中心で、土師器・須恵器・灰軸陶器のほか、土錘や石器などが出土している(第46図・第17・18・20表)。

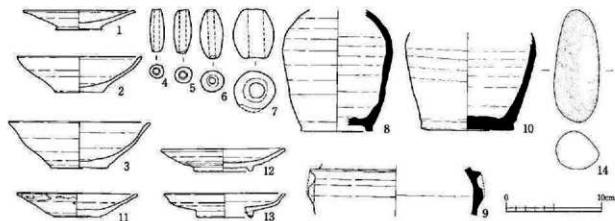
土師器は碗と皿がある。いずれも底部外面に回転糸切り痕が残る。碗(2・3)は10世紀中頃と考えられる。皿(1)は灰軸陶器写しで、10世紀前半に比定される。皿(11)は10世紀後半と考えられ、口縁部外面にスガが付着する。須恵器は、壺(8~10)3点を図示する。輪高台を付す8は長頸壺と考えられる。9は突帯をめぐらす胴部に双耳を有し、9世紀後半に比定される。灰軸陶器の皿(12)はハケ塗りで、9世紀後半に比定される。緑釉陶器の椀皿(13)は硬質の焼成で、薄緑色の釉を施す。黒笹90号窯式、9世紀後半の時期のものと考えられる。管状土錘は幅2cm前後のもの(4~6)と、幅4cmを超えるもの(7)がある。6のみ須恵質である。磨石(14)は棒状で1面に使用痕跡がみられる。肩部には敲打痕などはみられず、端軸方向に動かして使用したものと考えられる。



第45図 4区第1面遺構配置図(縮尺1/150)

第13表 4区第1面主要遺構一覧表

遺構名	グリッド	種別	形状	規模(m)		出土遺物	備考	埋没層
SP118	D21	柱穴	平面形:円形 断面形:遺留状	直径0.40	深さ0.08	弥生土錘・土師器(平安)	SP118-SP117を切る	第45-46図
SP120	D21	柱穴	平面形:楕円形 断面形:U字状	長軸0.46	短軸0.37	土師器(平安)		第45-46図
SP121	D21	柱穴	平面形:楕円形 断面形:U字状	長軸0.37	短軸0.34	土師器(平安)・須恵器(平安)	SP120に切られる	第45-46図
SP122	D21	柱穴	平面形:楕円形 断面形:U字状	長軸0.46	短軸0.38	深さ0.28	土錘	
SD16	B20~C22	溝	断面形:楕圓状	幅0.56~1.34	深さ0.14~0.22	弥生土錘・土師器(平安)・須恵器(古遺物層-平安)	SK06出土土錘と接合	第45-46図
						土師器(平安)・須恵器(平安)	流水方向:南西→北東	第45-46図
						灰軸陶器(平安)・石器		



第46図 4区第1面遺構出土遺物実測図(縮尺1/4)

1: SP118, 2: SP120, 3~9: SP121, 10: SP122, 11~14: SD16

## 2 遺構外出土遺物

弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器、古墳時代後期の土師器・須恵器、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・青白磁・白磁、土鎌のほか、石器、銭貨がある(第47~50図・第17・18・20・22表)。弥生土器(1~5)は後期後半から末のものが中心である。甕、壺、装飾器台がある。装飾器台(4)はいわゆる丹後系と呼ばれる器形を呈すと考えられる。壺(5)の外面上はS字スタンプ文が巡る。

土師器の壺(6)は古墳時代前期に比定される。外面をケズリ調整で仕上げている。

古墳時代後期の土師器は、甕(16)を図示した。くの字状口縁を呈し、胴部はタタキを施す。須恵器には甕(7~9)・壺(10・11)・脚部(12・13)がある。甕と脚部は外面に波状文を施す。甕(9)は沈線で区画したなかに描点列文を巡らすもので、TK209型式期に相当し、6世紀末から7世紀初頭の時期に比定される。

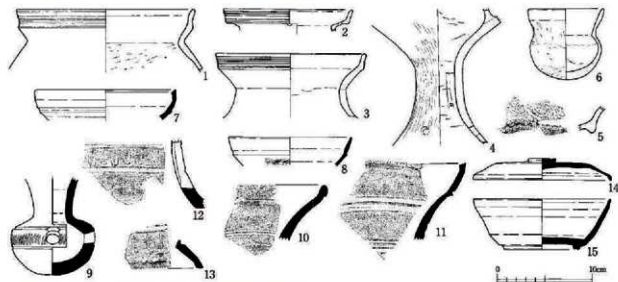
平安時代の遺物は多種多様であり、量も最多である。土師器には碗・皿・甕・壺・羽釜・鍋があり、9世紀末から10世紀代に比定される。碗は口縁部がほぼ直線的にのびるもの(18・19)と口縁端部付近で外反するもの(20~27)とがある。底部には回転糸切り痕が残る、平高台を有するもの(25・26)もみられる。また、内面に漆を塗布するもの(17)がある。耳皿は5区の包含層出土のものと一緒に2点出土しているが、図示できたのは28の1点のみである。皿は口縁部が内湾気味に立ち上がるもの(34・35・39・44)、口縁端部が外反するもの(29・36・38・40・43)、直線的にひらく器形を呈するもの(30~33・37・38・41・42)がある。甕(47~49)はくの字状口縁を呈し、口縁端部は丸く仕上げる。胴部外面はタタキを施す。羽釜(50・51)は、胴がやや丸みを帯び、口縁部が内傾する器形を呈する。鍋(52~55)は口縁部に向かってほぼ直線的にひらく器形で、口縁端部に狭小な面をもつ。口縁部は回転ナアによる後が明瞭である。全形をうかがえる資料は55のみで、底部は丸みを帯びるとみられる。胴部外面はタタキを施す。

須恵器は、坏蓋(14)と坏B(15)が9世紀中頃に比定され、そのほか(72~90)は10世紀前半に属するものが中心と考えられる。碗は底部外面に回転糸切り痕が残るものが多く、口縁部が内湾気味に立ち上がるもの(73)と口縁端部が外反するもの(72・74・77)がある。口縁部内外面に灯心油痕が付くもの(73)や、墨が付着するもの(76・77)もみられる。特に77は底部内面に墨が付着しており、転用碗の可能性が高い。壺類は全体をうかがえる資料がなく、双耳瓶の耳(81~83)や長頸壺の底部(80)などがみられる。甕は口縁端部内面がナデにより僅かに凹むもの(85)と、口縁端部に狭小な面をもつもの(86~90)がある。

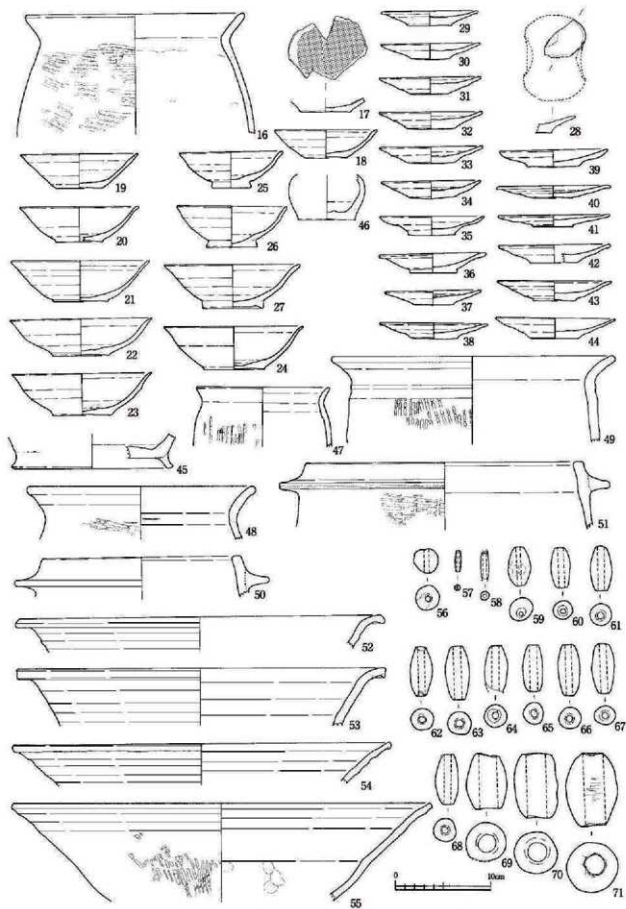
灰釉陶器は碗・皿・小壺がある。折戸53号窯式、10世紀前半に属するものが主体である。碗は、口縁

部が直線的にひらくもの(91)、口縁端部が外反するもの(92・93・95)、口縁部が丸みを帯びてひらくもの(94・96・98~100)がある。全て貼り付け高台で、三角高台(97・98・102)と、稜が不鮮明な三日月高台(99・101・103~106)、輪高台(100)がある。ナデ調整で仕上げているもの(102)を除いて、高台内には回転糸切り痕が残る。また高台内に墨書がみられるものが3点あり、2点(104・105)が「若栗」、1点(106)が「栗」と判読できる。これらの筆跡は、非常によく似ている。施釉はハケ塗り(93・94・97・99~103・105)と浸け掛け(95・96)がある。皿は、口縁端部が外反するもの(107・108・111・112)、やや内湾気味に立ち上がるもの(110)のほか、段皿(109・114)、折縁皿(113)がある。全て貼り付け高台で、輪高台(108・110)、三角高台(109・112~114)、稜が不鮮明な三日月高台(111)がみられる。ナデ調整で仕上げているもの(112・113)を除いて、高台内には回転糸切り痕が残る。施釉は110を除いて、ハケ塗りとみられる。小壺(115)は底部外面のみが露胎で、糸切り痕が明瞭に残る。

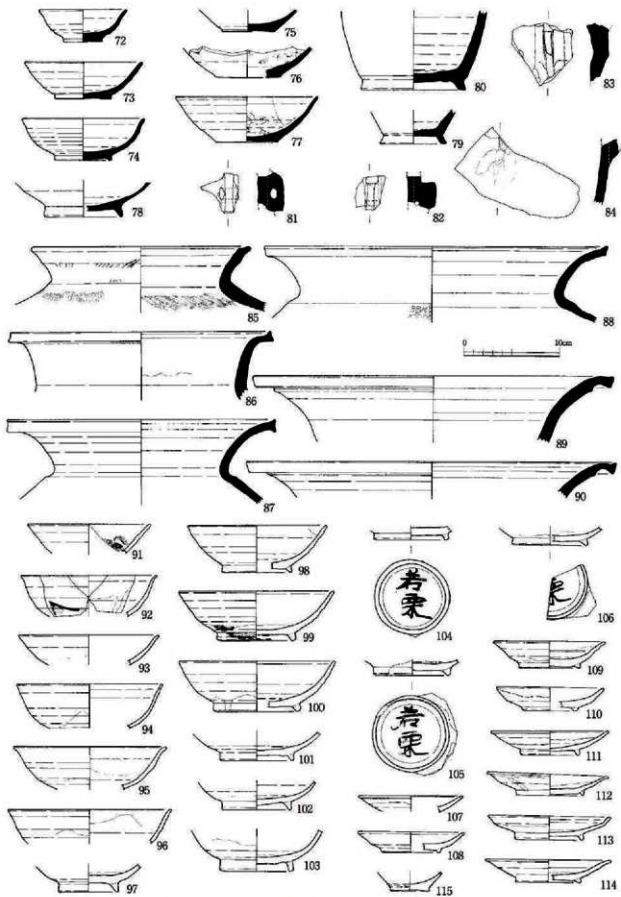
緑釉陶器は碗・皿・壺があり、10世紀前半に属するものが主体である。碗皿類の高台は全て貼り付け高台であり、輪高台(122・123・126・129)、有段輪高台(120・121・128・130)、三角高台(125)がみられる。焼成と釉調から、硬質の焼成で釉が濃緑色を呈するもの(117・120・121・124・131・133)、硬質の焼成で釉が薄緑色を呈するもの(118・119・123・125・126・130・132)、軟質の焼成で釉が濃緑色を呈するもの(116・122・127・128)、軟質の焼成で釉が薄緑色を呈するもの(129)にわけられる。底部外面に施釉しないもの(120・123)は少なく、全面施釉するもの(121・122・124・126・128・130・131)が多い。125・129は器面が荒れているため、釉の有無を確認できない。軟質の焼成で、内面にトチンの目跡が確認できるもの(122・128)については、近江産の可能性が高いと考えられる。碗は、底部内面に凹線による圏線がめぐるもの(120~123・128)、不鮮明な圏線が認められるもの(124・126)、圏線がみられないもの(125・129)がある。器形は口縁端部付近で外反するもの(116~119・121・122)が多く、口縁部が丸みを帯びてひらくもの(120)は少ない。ほかに、口縁端部に押圧による縦位の輪花を施す輪花碗(127)もみられる。皿は3点を図示する。ほぼ直線的にひらく器形を呈するもの(130)、口縁端部付近で外反する器形を呈するもの(131)、体部中位で屈曲して稜をもつ段皿(132)がある。130は、底部内面に凹線による圏線がめぐる。口縁部の残りが悪いため判然としませんが、内屈していつているようにも見え、耳皿の可能性も考えられる。壺は長頸壺1点(133)のみ確認している。



第47図 4区第1面遺構外出土遺物実測図1(縮尺1/4)



第48图 4区第1面遺構外出土遺物実測図2(縮尺1/4) [Hatched Pattern] 甲



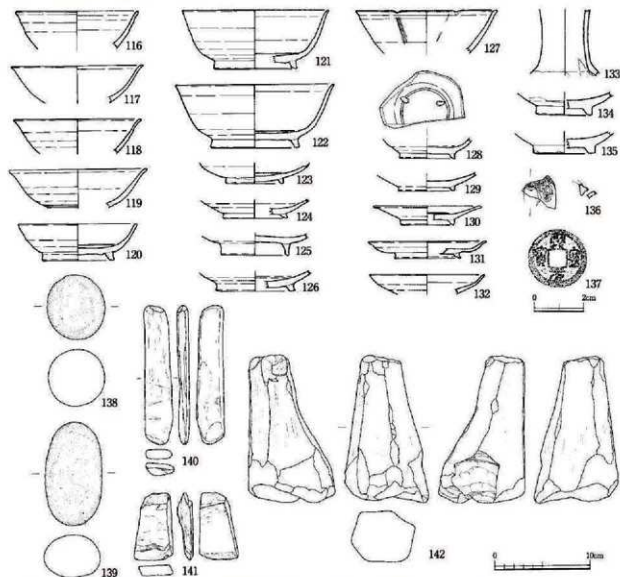
第49図 4区第1面遺構外出土遺物実測図3(縮尺1/4)

輸入磁器は白磁と青白磁があり、11世紀後半から12世紀後半の時期のものと考えられる。白磁(134・135)は、それぞれ白磁碗Ⅲ類<sup>(9)</sup>とⅡ類<sup>(10)</sup>の底部で、高台外面を直に、内面を斜めに削り出す。青白磁水柱(136)の体部には型押しによる精緻な浮き出しがみられる。

土鍾は土師質の管状土鍾が大半だが、球状土鍾(56)や須恵質の管状土鍾(59・63)もある。管状土鍾は、幅0.5cm前後のもの(57・58)、幅2.5cm前後のもの(59～68)、幅4.5cm前後のもの(69～71)にわけられる。

石器・石製品は磨石・磨製石斧・砥石を図示した。磨石は球形のもの(138)と、楕円形のもの(139)がある。前者は1面のみに使用痕跡が認められる。後者はやや大型で、片面の広い範囲に磨滅が認められる。磨製石斧は棒状を呈するもの(140)と不定形のもの(141)がある。前者は、全面に研磨が施される。扁平な自然礫の形状を生かし、刃部を研磨により簡単に付けたに過ぎない。実用品ではない可能性もある。後者は、刃部を中心に整形加工している。素材剥片の一部を研磨整形しただけの簡素な石斧で、自然剥離面を多く残すが、右側面は研磨により丁寧に整形されている。砥石(142)は大型の砂岩製で、長軸方向で5面が使用されている。全体によく使い込まれており、片端部に向かって端面が縮小している。

銭貨(137)は北宋銭の熙寧元寶である。



第50図 4区第1面遺構外出土遺物実測図4・拓影(116～136・138～142:縮尺1/4, 137:縮尺2/3)

## 第5節 4区(第2面)

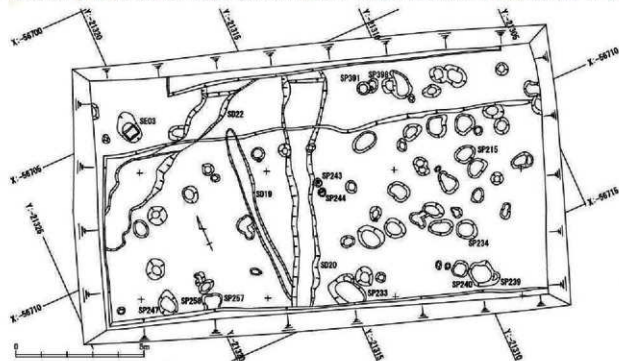
8層上面を第2面として記述する。また併せて、当区の北側で行った立会調査の成果も報告する。

遺構は井戸1基、柱穴72基、溝3条を検出した。5区の状況や、4区の10m西側で行った発掘調査(県道小浜インター線関係)の結果も踏まえて考えれば、古墳時代後期以前の集落の一部と考えられる。

## 1 井戸

SE03(第52~54図・第17・20・21表) 立会調査区の北西隅に位置する。掘形は南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、長軸1.02m、短軸0.63m、深さ0.65mを測る。この掘形の南側に寄せて、井戸枠をその底面から0.17m打ち込んでいる。井戸枠は4枚の板を四角く組む縦板組構造である。東西辺の縦板の幅が0.34~0.35m、南北辺の縦板の幅が0.37mであり、平面形は南北に長い長方形を呈する。東西の縦板の両端には決りが施されており、そこに南北の縦板をはめ込むようにして4隅をびたりと組み合わせている。縦板下方の両端には穿孔があり、遺存していなかったが有機質の紐状のものを穿孔に通して4隅を緊縛していたと想定される。

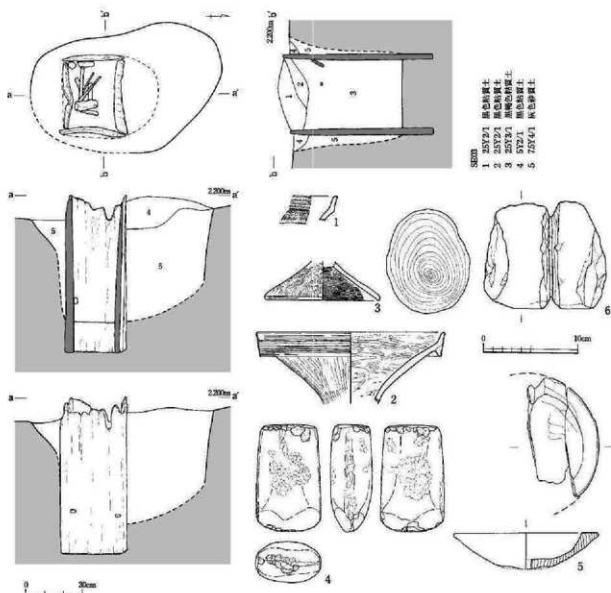
井戸枠内は細長い板材や枝など多量の加工木や自然木を含む土で一度に埋められており、その下方で器台(2)、木錘(6)、太型刃石斧(4)などが出土している。図示した壺(1)や脚部(3)は小片で、器



第51図 4区第2面遺構配置図(縮尺1/150)

第14表 4区第2面主要遺構一覧表

遺構名	グリッド	種類	形状	規模(m)	出土遺物	備考	埋没層
SP215	D20	柱穴	平面形:楕円形 断面形:楕円状	長軸0.83 短軸0.63 深さ0.17	赤生土器・木錘(古墳前期)		第54~56層
SP223	C21~C22	溝	平面形:横門形 断面形:楕円状	幅1.40 深さ0.99 深さ0.19	赤生土器・土師器(平安)		第54~56層
SP234	D21	柱穴	平面形:楕円形 断面形:楕円状	長軸0.64 短軸0.70 深さ0.26	埴輪土師器(古墳後期)		第54~56層
SP240	D21	柱穴	断面形:角が緩やかな違合形				
SP244	C21	柱穴	平面形:長五方形 断面形:半円形	長軸0.64 短軸0.59 深さ0.21	須賀屋(平安)		第54~56層
SP247	B22	柱穴	平面形:円形 断面形:角が緩やかな違合形	直径0.30 深さ0.17	柱根		第54~56層
SP398	C20	柱穴	平面形:楕円形 断面形:楕円状	長軸1.00 短軸0.73 深さ0.28	赤生土器		第54~56層
SD19	B20~C21	溝	平面形:U字状 断面形:成層状	長軸0.62 短軸0.43 深さ0.08	埴輪	SP391を切る	第54~56層
SD20	C20~C22	溝	平面形:U字状 断面形:成層状	幅0.36~0.97 深さ0.10~0.26	土師器(古墳前期・平安)・須賀屋(平安)	流水方向:南→北	第54~56層
SD22	A21~B20	溝	断面形:角が緩やかな違合形	幅0.73~1.70 深さ0.08~0.32	赤生土器・土師器(平安)・須賀屋(平安)・成層陶器(平安)	流水方向:南西→北東	第54~56層
SE03	A21~B20	溝	断面形:角が緩やかな違合形	幅0.64~1.81 深さ0.06~0.16	赤生土器・土師器(平安)・木錘	流水方向:南→北	第54~56層



第52図 4区第2面SE03実測図(縮尺1/20)

第53図 4区第2面SE03出土遺物実測図1(縮尺1/4)

台も受部のみであるが、木鏝と太型蛤刃石斧は完形である。ほかに梅と桃の種子各1点も出土している。

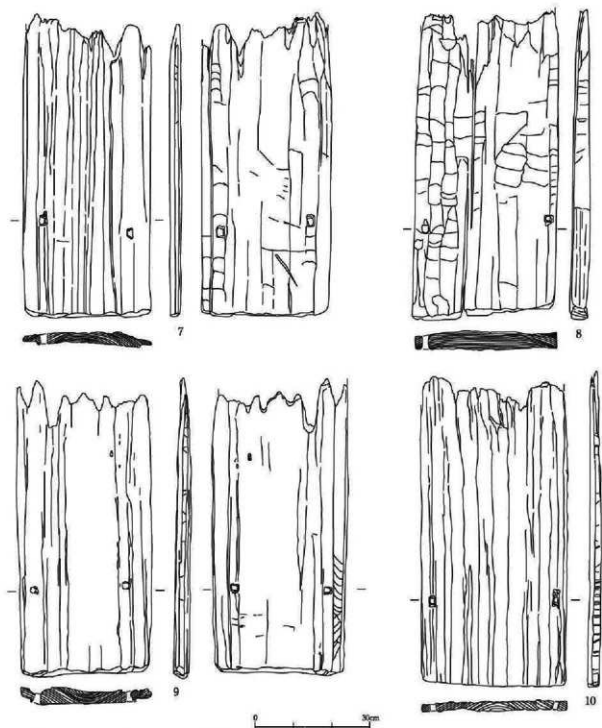
壺(1)は有段口縁をもち、器壁が非常に薄い。器台(2)は直立する有段口縁をもち、口縁部下端を垂下させる。脚部(3)はハの字状にひろく器形を呈し、口縁端部は狭小な面をもつ。太型蛤刃石斧(4)は砂岩製で、表面には完成後に付いたと考えられる敲打痕を多く残す。刃部も潰れており、刃の稜は不明瞭である。容器(5)は口縁端部が肥厚し水平になる。底部は欠損し不明であるが、高坏の可能性もある。木鏝(6)は両端を広く加工し、中央部に浅くV字状の溝が1周する芯持の丸太材である。井戸枠の縦板(7~10)は加工の幅が約2cmと、SE01の井戸枠の加工幅よりも狭い。また、SE01の縦板の接合面が全て斜めに切断されるのに対し、SE03では2枚の板の両端部のみが切り欠かれるという接合面の違いがある。

出土遺物や縦板組み井戸の類例などから判断すれば、弥生時代後期後半に属する遺構と考えられる。

## 2 遺構出土遺物

弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての土器、古墳時代後期の土師器、平安時代の土師器・灰





第54図 4区第2面SE03出土遺物実測図2(縮尺1/10)

釉陶器、柱根・木製品を図示する(第56図、第17・21表)。

弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての土器には、甕(1~3・12)、壺(4・10)、高坏(5・14)、脚部(8)がある。甕(12)の内面には円形の押圧2点がみられる。甕形土製品(6)は付け底部分の基部と考えられる。平安時代の土師器の甕(11)の胎土には雲母が多く含まれており、旧三方町方面からの搬入品の可能性がある。羽釜(15)は鋳が断面三角形を呈し、口縁部が直立する。灰釉陶器の椀(13)は、口縁端部付近でわずかに外反する器形を呈する。羽釜と灰釉陶器は10世紀に属すると考えられる。

柱(7)は割材で、柱(9)は芯持材である。加工木(16)は断面楕円形で一端を7cm程尖らせ棒状を呈す。

## 3 遺構外出土遺物

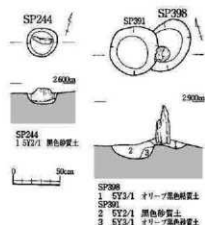
弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての土器が主で、古墳時代後期の土師器・須恵器、平安時代の土師器・灰釉陶器、土鐘、石器なども出土している(第57図、第17・18・20表)。

弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての土器には、甕(1)、壺(3~7)、高坏(9)、器台(10・11)、鉢(15)、脚部(12・13)、脚台(14)、胴部(8)、底部(2)がある。

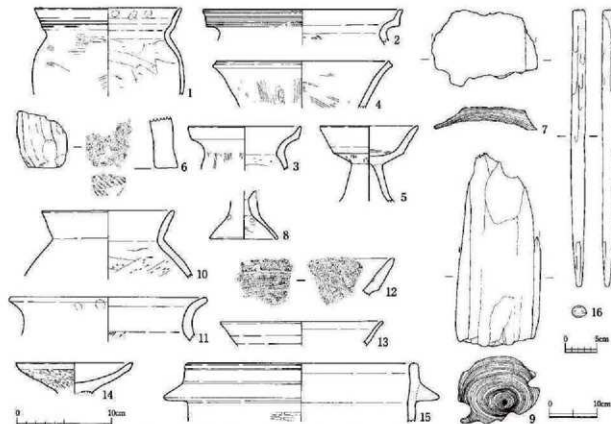
古墳時代後期の土師器と考えられるのは、甕(16~18)と甕形土製品(19~21)である。甕は、くの字状口縁を呈し、口縁端部を丸くおさめるもの(16)と、口縁端部を外反させるもの(17・18)がある。甕形土製品は庇(19)と基部(20・21)がある。基部は端部が内面に肥厚するもの(20)と内外面に肥厚するもの(21)にわけられ、後者の底面には棒状のものを並べた上で製作した結果ついたと考えられる圧痕がみられる。須恵器は甕(23)1点を図示する。沈線で区画したなかを波状文で飾り、つぶれた球形を呈する。TK10からTK43型式期に相当し、6世紀後半の時期のものと考えられる。

平安時代の土師器は、椀(24・25)と皿(26)がある。いずれも底部外面に回転糸切り痕が残り、平高台様を呈するもの(25)もみられる。灰釉陶器の椀(27)は浸け掛けにより施釉する。

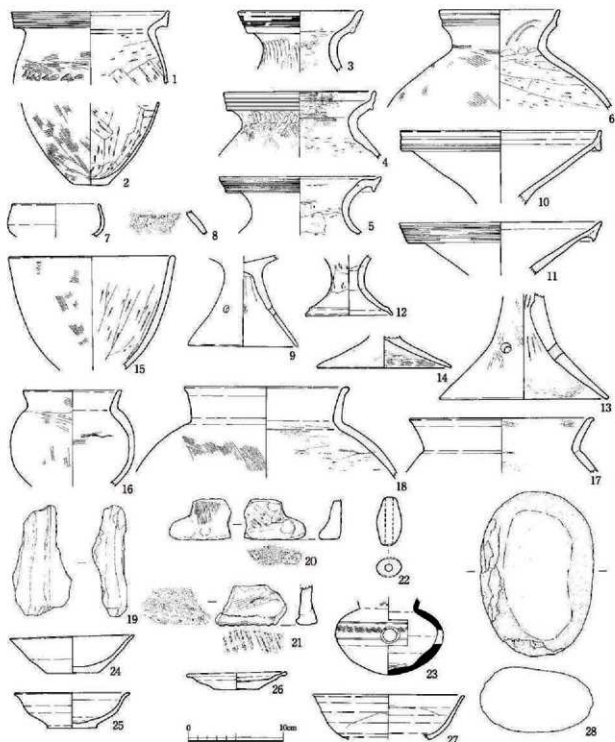
小型の石皿(28)は、使用された面のみがややくぼむ。使用痕跡は明確ではないが、長軸方向に僅かに擦痕を残す。側面部の一部は剥落しており、敲き石として利用された可能性もある。



第55図 4区第2面柱穴実測図  
(縮尺1/40)



第56図 4区第2面遺構出土遺物実測図(1~6・8・10~15:縮尺1/4, 7・9:縮尺1/8, 16:縮尺1/6)  
1:SP215, 2~5:SP230, 6:SP234, 7:SP244, 8:SP247, 9:SP391, 10~11:SD19, 12~13:SD20, 14~16:SD22



第57図 4区第2面遺構外出土遺物実測図(縮尺1/4)

### 第6節 5区

4区と同様に遺構面が2面ある可能性があったため7層上面で精査を行ったが、遺構は確認できなかった。8層上面では、掘立柱建物1棟、井戸1基、柱穴136基、土坑3基、溝6条を検出している。古墳時代後期に属するものが主体で、当該期の遺跡の中心部にあたると考えられる。

#### 1 掘立柱建物

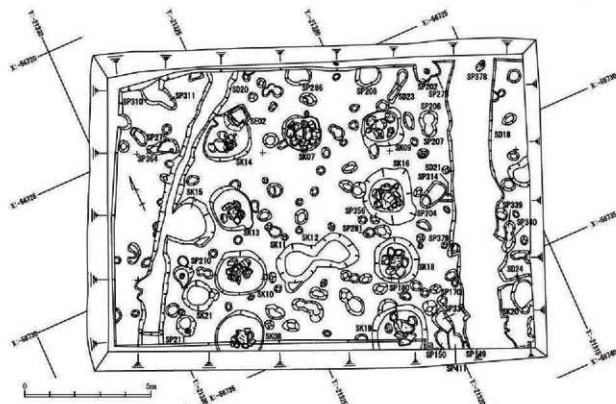
SB01(第59・60図、第17・21表) B24からD26グリッドにかけて位置する。南辺が調査区外にのびる

ため確定はできないが、四面庇付建物である可能性が高いと考えられる。身舎は桁行3間(7.60~8.00m)以上、梁行2間(6.00~6.40m)で、桁行方向はN19°Wである。柱間寸法は、桁行が2.30~3.00m、梁行が3.00~3.30mを測る。庇の柱間寸法は、桁行が1.92~2.88m、梁行が2.16~3.20mを測る。

身舎の柱穴は円形または隅丸方形を呈し、長軸1.50~2.18m、短軸1.36~1.80m、深さ0.28~0.46mを測る。掘削の際に出た土を0.10m程度入れて底面を整えた後、中央付近に直径または一辺が0.14~0.46mを測る円礫または角礫を置き、その周りを囲むように直径または一辺が0.40~0.82mを測る円礫または角礫6~10石を配置している。柱を設置したと推測される中央の石が最も大きく、その上面の海拔高は2.30~2.50mではば一定している。SK13では、直径0.37mを測る柱痕を確認している。

庇の柱穴は円形または楕円形を呈し、長軸0.74~1.08m、短軸0.50~0.72m、深さ0.14~0.26mを測る。このうち、SP210・211・275・278の4基にはミカン割材の柱根が遺存していた。年輪年代測定で、22が年輪年代510A D、24が年輪年代525A D、25が年輪年代395A Dとの鑑定結果を得ている<sup>(1)</sup>。

身舎や庇の柱穴からは、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての土器と古墳時代後期の土師



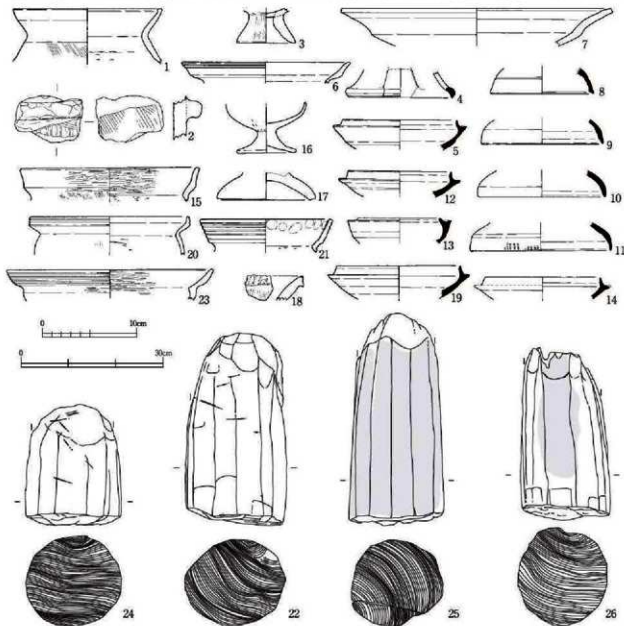
第58図 5区遺構配置図(縮尺1/150)

第15表 5区主要遺構一覧表

遺構名	グリッド	種類	形状	規模(m)	出土遺物	備考	埋没状況
SK20	D26-E26	土坑	平面形:楕円形 断面形:角が緩やかな窪台形	長軸1.36 短軸0.85 深さ0.28	須恵器(古墳後期)	SD24に切られる	第58-64図
SK21	B26	土坑	平面形:円形 断面形:角が緩やかな窪台形	長軸 短軸 深さ	須	SP290を切る	第58図
SP180	D26	柱穴	平面形:楕円形 断面形:半円形	長軸0.45 短軸0.32 深さ0.23	柱根		第58-63-64図
SP281	C25	柱穴	平面形:楕円形 断面形:角が緩やかな窪台形	長軸0.48 短軸0.37 深さ0.20	柱根		第58-63-64図
SP339	D25	柱穴	平面形:角が緩やかな窪台形 断面形:半円形	長軸0.81 短軸0.43 深さ0.23	土師器(古墳前期)		第58-64図
SP358	C25	柱穴	平面形:円形 断面形:U字状	長0.33 深さ0.18	弥生土器		第54-66図
SP378	D24	柱穴	平面形:楕円形 断面形:半円形	長軸0.49 短軸0.37 深さ0.30	柱根	SD18上の階床不崩	第58-63-64図
SP379	D25	柱穴	平面形:楕円形 断面形:U字状	長軸0.41 短軸0.35 深さ0.27	柱根	SD18上の階床不崩	第58-63-64図
SD20	B24~B26	溝	断面形:U字状	幅0.73~1.70 深さ0.09~0.32	弥生土器・須恵器(古墳後期)	溝水方向:東西一北東 4区から続く	第58-66図
SD21	D25	溝	断面形:	幅0.32 深さ0.08	須	溝水方向:東一北	第58図
SD23	D24	溝	断面形:角が緩やかな窪台形	幅0.27~0.42 深さ0.18	須	溝水方向:東西一北	第58-66図
SD24	D25~E26	溝	断面形:U字状	幅0.28~0.40 深さ0.12~0.21	弥生土器	溝水方向:東一北	第58図

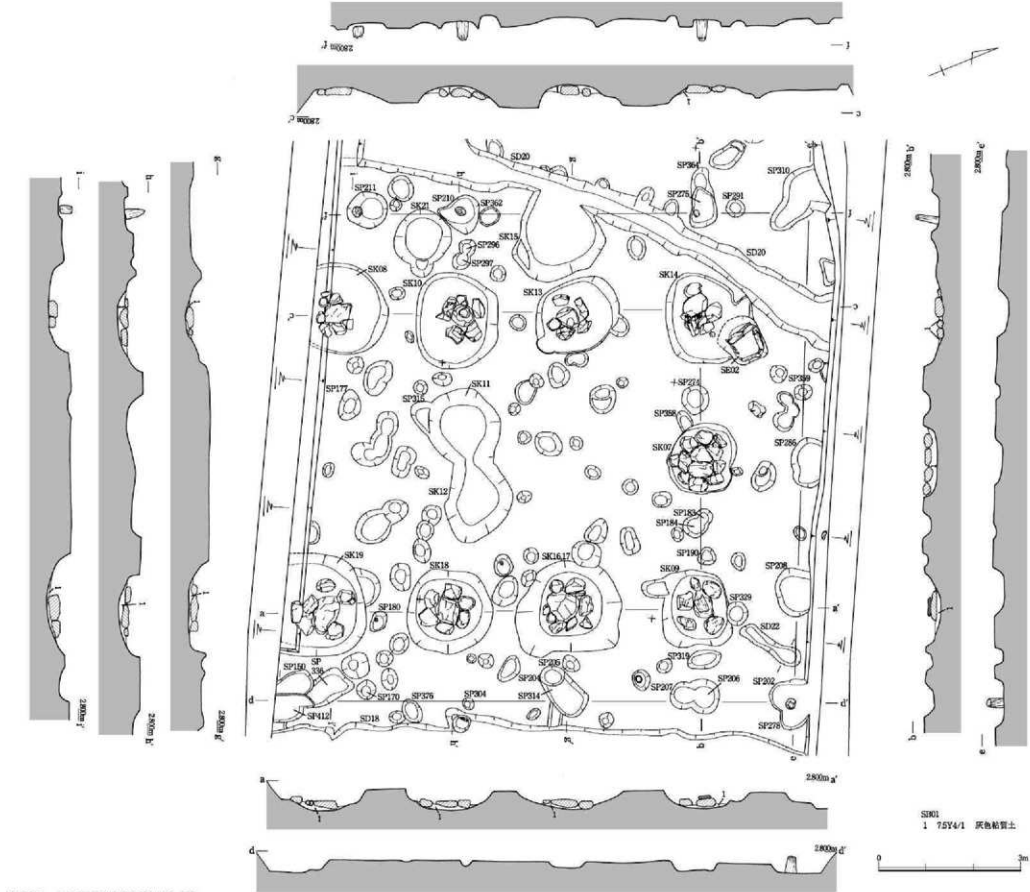
器・須恵器が出土しているが、全て小片である。弥生土器は甕(6・20)、壺(15・16・18・21)、高坏(7)、鉢(23)があり、後期後半を主体とする。布留系の甕(1)は古墳時代前期に比定される。古墳時代後期の須恵器には坏蓋(8~11)・坏H(5・12・14・19)・有蓋高坏(13)・高坏の脚部(4)がある。TK209型式期に相当するものが主体である。坏蓋は、外面に天井部と口縁部をわける沈線が認められるもの(8)、沈線が不鮮明なもの(11)、沈線が確認できないもの(9・10)がある。口縁部は、内傾する凹面を形成するもの(8)、内面に微かな沈線がめぐるもの(9)、丸くおさめるもの(10・11)がある。坏Hは全て口縁部が先細りとなる。このほか、柱を据えた石の下から出土した破片(2)は甕形土製品と考えられる。

底の柱根の年輪年代鑑定を依頼した光谷拓実氏は、「3本の年輪年代のなかでもっとも新しい年輪年代は、SP211の525年です。この年輪年代に削除されてしまった年輪数を加算すると、565~575年の年代が考えられます。これにさらに失われたであろう心材部の年輪を増すことになるから、伐採年は600年前後が妥当と思われます。」と述べられている<sup>11)</sup>。この結論は、柱穴出土須恵器の年代観とも符合してお



第59図 5区SB01柱穴出土遺物実測図(1~21・23:縮尺1/4, 22・24~26:縮尺1/8)

1~4:SK07, 5:SK09, 6:SK11, 7~13:SK14, 14:SK17, 15~17:SK15, 18・19:SP204, 20:SP206, 21:SP208  
22:SP210, 23・24:SP211, 25:SP275, 26:SP278



第60圖 5区SB01実測図(縮尺1/80)

り、SB01の時期は6世紀末から7世紀初頭と考えられる。

## 2 井戸

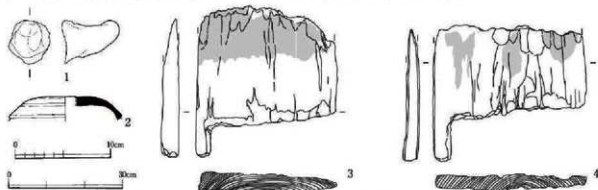
SE02(第61・62図、第17・21表) B24グリッドに位置し、掘立柱建物SB01の柱穴SK14を切って構築されている。掘形は東西に長軸をもち、長軸0.99m、短軸0.73~0.92m、深さ0.29mを測る隅丸長方形を呈する。掘形の北東に寄せて井戸枠を設置する。井戸枠は大きさも厚さも不均一な板材12枚を方形に打ち込む構造で、長軸0.70m、短軸0.61mを測る。枠板に用いられた板材は、長さ0.14~0.53m、幅0.04~0.40m、厚さ0.01~0.05mを測り、このうち2枚の下端は杭状に尖っていた。また、東側と北側の枠板として建築部材(扉または葺)2枚が転用されていた。

枠内からは弥生土器、土師器、古墳時代後期の須恵器が少量出土している。土師器の把手(1)は、銅または鉄に付属すると思われる。須恵器の坏蓋(2)は天井部と口縁部をわける沈線が明瞭である。このほか、桃の種子が出土しているが、取り上げ時にバラバラに破損した。井戸枠(3・4)は原もしくは葺板の転用で、断面楕円形の軸部がそれぞれ8cmと11.5cm遺存する。軸部側が厚く他方へ行くほど薄くなる。もう片方の軸や把手が不明のため扉か葺かは不明である。4は比較的芯に近い材を使用していると考えられる。

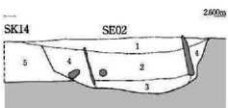
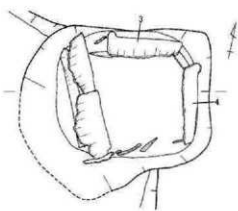
SE02はSB01の柱穴SK14を切って構築されており、SB01よりも新しいと考えられる。出土遺物はSB01で出土した須恵器とほぼ同時期とみられるが少量であり、SE02に確実に伴うとは判断しかねる。枠板に転用された板材がSB01で使用されたものと想定すれば、SB01廃絶後あまり間をおかずに作られたと考えられる。

## 3 遺構出土遺物

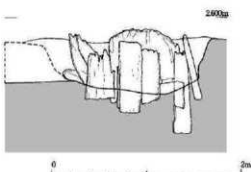
弥生土器、土師器、須恵器、柱根などが出土している(第64図、第17・21表)。



第62図 5区SE02出土遺物実測図(1・2:縮尺1/4, 3・4:縮尺1/10)



SE02	1 75Y2/1	3 25Y3/1	黒褐色砂質土
	2 N2/1	4 N2/1	暗灰色砂質土
		SK14	
		5 10YR4/1	灰褐色砂質土



第61図 5区SE02実測図(縮尺1/40)  
図中の番号は第62図に対応

弥生土器は有段口縁の寛(5)で、後期末に属すると考えられる。土師器(4)は鉢もしくは高坏と考えられる。須恵器の坏H(1)はTK209型式期に相当する。柱(7)は割材で、柱(2・3・6)は芯持材である。

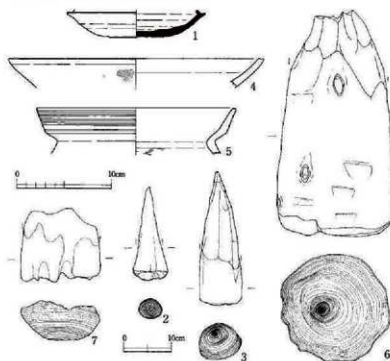
## 4 溝

SD18(第58・65・66図、第17表) D24からD26グリッドにかけて位置する。流水方向が南西から北東とみられる溝で、幅1.57~2.10m、深さ0.08~0.25mを測る。断面形は角が緩やかな逆台形を呈する。同一と考えられる溝が4区では確認できないため、北側は途中で屈曲しているか途切れていると予想される。SB01の東辺に平行する直線的な溝であることを重視すれば、区画溝の可能性が考えられる。

弥生土器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の土師器・須恵器、平安時代の土師器が出土している。

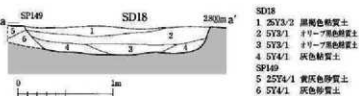


第63図 5区柱穴実測図(縮尺1/40)



第64図 5区土坑・柱穴出土遺物実測図  
(1・4・5:縮尺1/4、2・3・6・7:縮尺1/8)

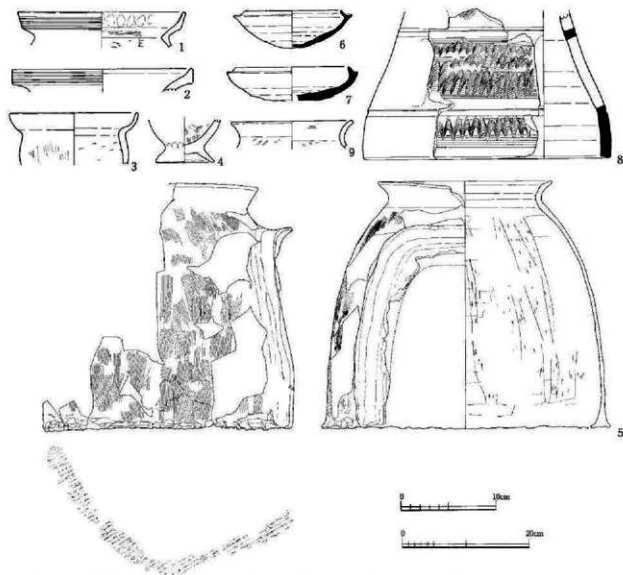
1:SK20・SK09、2:SP180、3:SP281、4:SP329、5:SP356、6:SP278、7:SP279



第65図 5区SD18土層図(縮尺1/40)

弥生土器には甕(1~3)と、壺または甕の底部(4)がある。古墳時代後期の須恵器は、TK209型式期に相当し、6世紀末から7世紀初頭の時期に比定される。坏H(6・7)は、口縁部が反り気味に内屈し、口縁端部は丸く仕上げる。器台の脚部(8)は内湾気味に脚端部に至る。外面はカキ目調整の後、土線で区画したなかを波状文で飾る。上段に三角形、下段に砲弾形を呈すると推測される透かしを縦に直線的にあげていたとみられる。土師器では甕形土製品(5)を図示する。左半分が遺存し、出土した甕形土製品のなかで唯一器形のわかる資料である。大型で、くの字状口縁に、截頭円錐形の体部をもつ。基部は端部が内外面に肥厚して末広がりとなり、底面に圧痕がみられる。これは、棒状のものを並べた上で製作した結果と考えられる。底は付け底で、焚口は逆U字形を呈する。外面はハケ、内面はケズリで仕上げるが、内面には輪積み痕が明瞭に残る。前述した須恵器と同時期のものと考えられる。





第66図 5区SD18・SD20出土遺物実測図(1~4・6~9:縮尺1/4, 5:縮尺1/6)  
1~8・SD18, 9・SD20

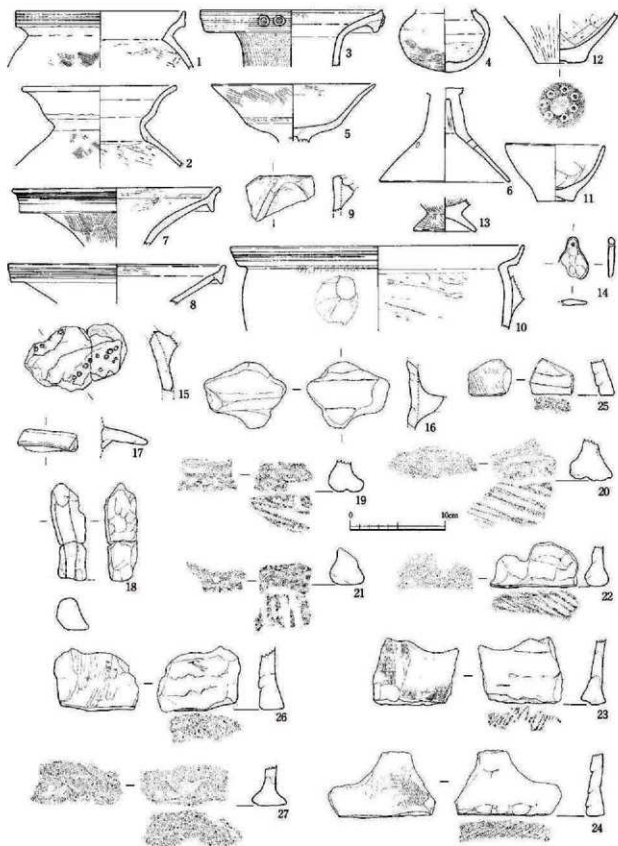
## 5 遺構外出土遺物

弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器、古墳時代後期の土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・白磁のほか、瀬戸焼、土錘、瓦、石器、木製品、銭貨(寛永通寶)がある(第67~69図、第17~22表)。

弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器は、壺(1)、壺(2~4)、高坏(5・6)、器台(7・8)、鉢(9~11)、底部(12)、脚台(13)、土製品(14)を図示する。底部(12)は、凹底の外面に竹管文を施す。

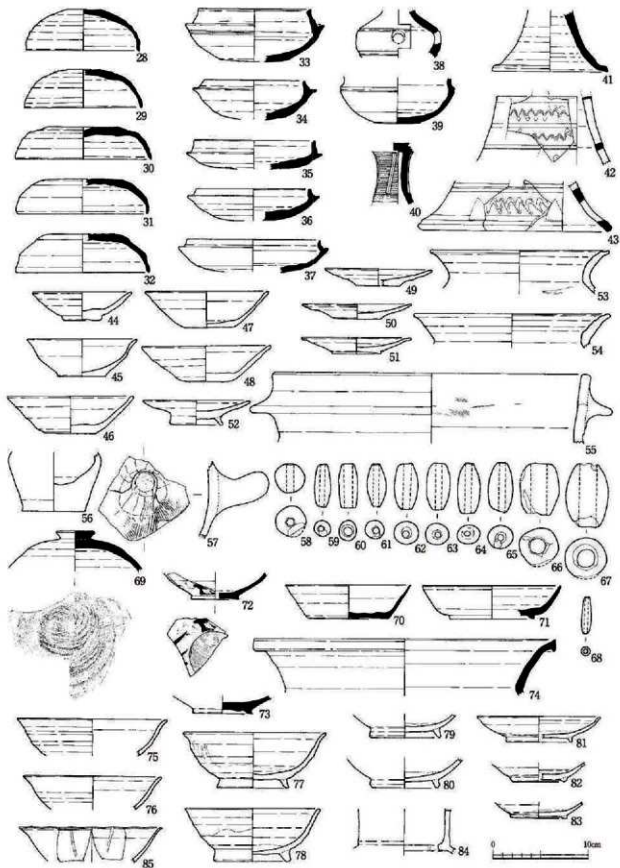
古墳時代後期の須恵器は坏蓋(28~32)、坏H(33~37)、甕(38)、鉢(39)、高坏(40)、脚台(41~43)があり、TK43型式期に相当する坏H(33)以外は6世紀末から7世紀初頭の時期のものが主体を占める。これと同時期と考えられるのが甕形土製品(15~27)である。甕(15・16・17・18)は全て付け庇で、庇の周囲を刺突で飾るもの(15)もある。基部は端部が内外面に肥厚するもの(19~23・27)と、外面に肥厚するもの(24・26)、基部と体部の厚みが変わらないもの(25)がある。底面に製作時の圧痕が残るもの(19~24)が多い。

古代の遺物は10世紀代が主体と考えられるが、須恵器の蓋(69)は8世紀後半、坏A(70)と坏B(71)は9世紀中頃に比定される。土師器は、碗・皿・甕・壺・羽釜などがある。碗・皿は底部外面に回転糸切



第67図 5区遺構外出土遺物実測図1 (縮尺1/4)

り痕が残るものが多い。甕(53・54)は口縁内面に回転ナデによる稜線が明瞭にみられるくの字状口縁、いわゆる段々口縁を呈する。把手(57)は甕に付く可能性が高い。須恵器は蓋・坏A・坏B・碗・甕があ



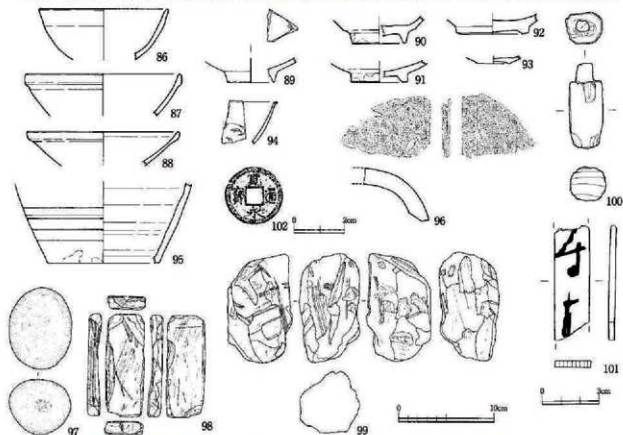
第68图 5区墓葬外出土器物实测图2 (缩尺1/4)

る。蓋(69)は扁平な宝珠形つまみをもち、内面に同心円文当て具痕が確認できる。碗(72)は外面に墨が付着する。灰陶陶器は碗・皿・壺がある。碗・皿は全て貼り付け高台で、三角高台(77・79・81・83)と、後が不鮮明な三日月高台(78・80・82)がある。高台内はナデ調整で仕上げているもの(77・78・81・83)を除いて、高台内に回転糸切り痕が残る。施釉はハケ塗り(78~80・81・82)と浸け掛け(77・83)がある。碗は口縁端部付近で外反する器形を呈する。皿は、折縁皿(81)と比べ、ほかの皿の高台が低く、粗雑な印象を受ける。壺(84)は2個体確認したうちの1点で、頸部内面に面をもつ。緑陶陶器は、口縁端部に押圧による縦位の輪花を施す輪花碗(85)のみ図示できた。硬質の焼成で、濃緑色の釉を施す。陶磁器には、11世紀後半から12世紀前半に比定される白磁と、12世紀末以降の所産と考えられる瀬戸焼がある。碗(86)は白磁碗V-1類<sup>2)</sup>で、体部下位で丸味をもち、口縁端部を丸くおさめる。同一個体であると思われる90は、高く直立する細い高台をもち、見込みには沈線が巡る。87・88は、白磁碗IV類<sup>2)</sup>である。口縁部を肥厚して玉縁状に仕上げる。89・94は、白磁碗V-4b類<sup>2)</sup>の底部と口縁部であるが、口縁端部は水平に仕上げられ、ともに内面に櫛状工具により劃花文を描出する。91は、白磁碗II類<sup>2)</sup>の底部である。92は、白磁碗IV類<sup>2)</sup>の底部であるが、削り出しがわずかなために、高台は厚みをもつ。外面には工具痕がみられる。皿(93)は、白磁皿V類<sup>2)</sup>の底部である。上げ底状で、見込みには段を持つ。瀬戸焼(95)は、瓶子と思われる。体部外面には灰釉が施され、沈線が巡る。また内面も薄く施される。

九瓦(96)は埴し瓦で、凹面にコピキB手法が認められる。16世紀以降のものと考えられる。

土錘は土師質のもの(58~67)と須恵質のもの(68)がある。球状土錘(58)、管状土錘(59~68)があり、管状土錘は幅1cmのもの(68)、幅2cm前後のもの(59~66)と、幅4cmを超えるもの(66・67)にわけられる。

石器・石製品は、磨石・砥石を図示する。磨石(97)は敲き石を兼ねたものである。1面に使用痕跡が



第69図 5区遺構外出土遺物実測図3・拓影(86~99:縮尺1/4, 100・101:縮尺1/2, 102:縮尺2/3)

認められ、それとは別の端部に僅かな敲打痕が見られる。砥石は、珪質粘板岩製(98)と軽石製(99)がある。前者は板状仕上げ砥石である。主として表裏2面を使用しているが、両端面と2側面にも若干使用された研磨痕が認められる。また、左側面には、長軸方向に切った溝に沿って割った痕跡がある。砥面の再生を試みたものと考えられる。後者は原石の形状が残り、面的になる部分はほとんどない。筋状となる部分が3箇所あるほか、アーチ状に窪んだ部分が4箇所認められ、V字状の傷が数箇所のみられる。

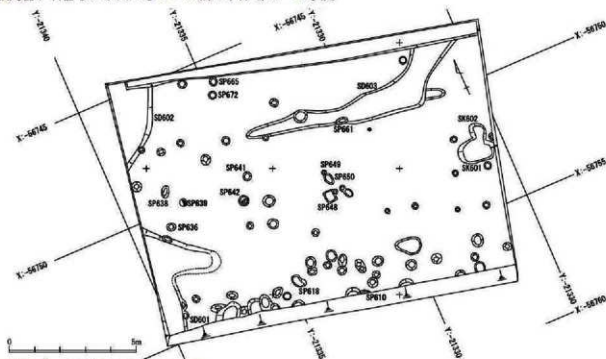
木製品は2点図示する。栓(100)は下部端1cm程を細く加工し、上部は摘み状に0.5cm程が突出する。割材である。木簡(101)は上下端が欠損しており、2字分の墨書があるが判読できない。柁目材である。

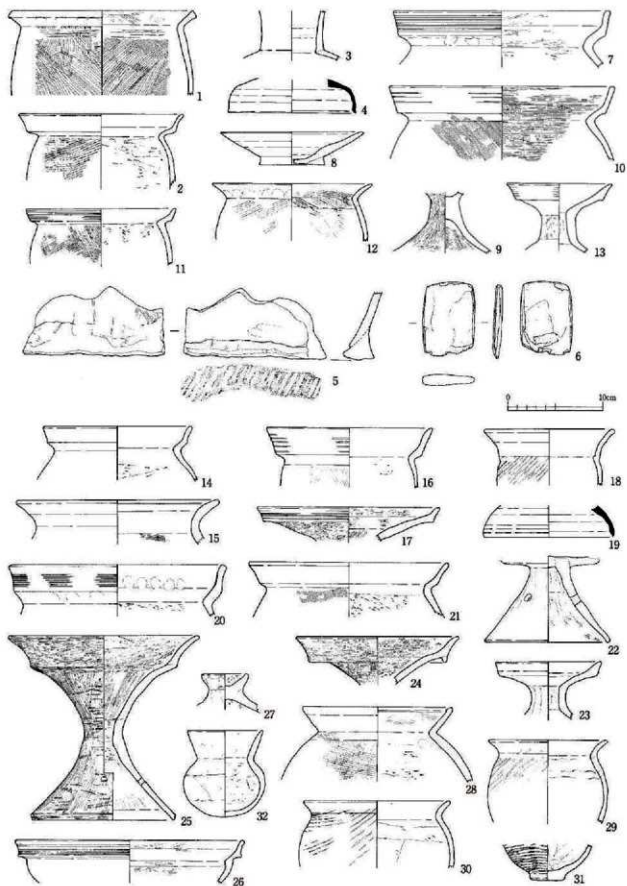
## 第7節 6区

最もJ R沿いの箇所から、3分割にして立会調査を行った。柱穴約70基、土坑2基、溝3条などを検出した。掘立柱建物は確認できず、遺構密度も高くない。古墳時代以前の集落の一部と考えられる。

### 1 遺構出土遺物

弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器、古墳時代後期の土師器・須恵器、平安時代の土師器・灰釉陶器、石器などが出土している(第71図、第17・20表)。





第71図 6区遺構出土遺物実測図(縮尺1/4)

1・2: SK601・602, 3: SP610, 4: SP618, 5・6: SP636, 7: SP638, 8: SP641, 9: SP642, 10: SP648, 11: SP660, 12: SP661, 13: SP665, 14・15: SD601, 16~19: SD602, 20~32: SD603

弥生土器には甕(1・2・7・10・11・14・16・20・21)、器台(17・24・25)、鉢(26)、蓋(27)があり、後期後半から末を主体とする。古墳時代前期に比定される土師器には、甕(12・18・28~30)、壺(32)、高坏(22)、器台(13・23)、底部(31)がある。布留系の甕(28)や胴部外面にタタキを施す甕(29・30)などがみられる。古墳時代後期の須恵器は、坏蓋(4)がMT85型式期、坏蓋(19)がTK209型式期に相当すると考えられる。甕形土製品の基部(5)も同時期の所産と考えられる。平安時代の土師器は平高台をもつ皿(8)と、くの字状口縁を呈する甕(15)を図示する。灰釉陶器の壺(3)は頸部内面の屈曲が鋭く、施釉はハケ塗りである。石器は粘板岩製の扁平片刃石斧(6)を図示する。全体としては丁寧な作られているにも関わらず、刃部が斜行し、不自然な形状を呈することから、刃部は再生されたものと考えられる。

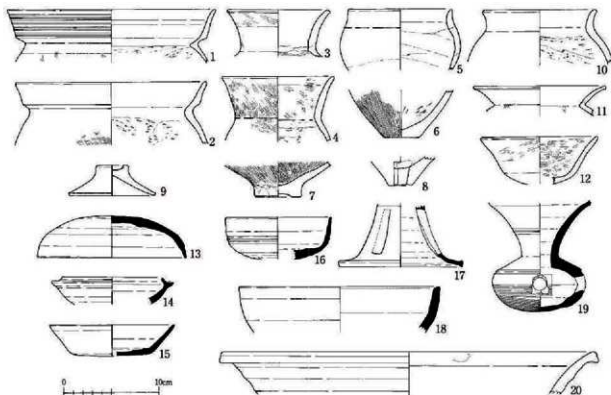
## 2 遺構外出土遺物

弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器、古墳時代後期の須恵器、平安時代の土師器・須恵器などが出土している(第72図、第17表)。

弥生土器は、甕(1・2)、壺(3~5)、底部(6・7)、有孔鉢(8)、蓋(9)などがあり、弥生時代後期末を主体とする。甕(10・11)と高坏(12)は古墳時代前期に帰属すると考えられる。古墳時代後期の須恵器はTK209型式期に相当するものが中心であり、坏蓋(13)、坏H(14)、高坏(16)、脚部(17)、鉢(18)、甕(19)がある。須恵器の坏A(15)は9世紀中頃、土師器の鍋(20)は10世紀代の所産と考えられる。

### 註

- 1 光谷拓実 2007 「年輪年代法による弥生・古墳の最新情報」 [news letter] No.7 国立歴史民俗博物館
- 2 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と羅年を中心として—」 [九州歴史資料館研究論集] 4 九州歴史資料館



第72図 6区遺構外出土遺物実測図(縮尺1/4)

















第18表 土製品観察表

検体番号	区	グランド	遺構・部位	種類	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	特徴	色調	胎土	焼成	備考
60206	3	D14	SP96	土師質・土師	4.7	2.2	0.7	17.1	手づく	10YR7/2 に白・黄褐色	微細な赤・黒色粒子少量含む	中々軟	磁器欠損
43201	3	B14	SK09	土師質・土師	2.1	1.6	0.5	3.9	手づく	10YR7/3 に白・黄褐色	1mm以下の白・赤・黒色粒子少量含む	中々軟	光形
43209	3	C15	SD14	土師質・土師	3.6	1.4	0.5	5.4	手づく	10YR5/2 に白・黄褐色	微細な白色粒子少量含む	中々軟	光形
43201	3	D14	SR01(東端7ヶ所)	土師質・土師	4.4	1.7	0.7	11.3	手づく	10YR5/3 に白・黄褐色	1mm以下の白・赤・黒色粒子少量含む	中々軟	光形
43202	3	D14	SR01	土師質・土師	4.8	2.2	0.8	18.6	手づく	7.5YR7/4 に白・褐色	1mm以下の白・赤・黒色粒子少量含む	中々軟	ほぼ光形
44209	3	D15	無磨白合箱	土師質・土師	3.9	2.0	0.5	6.7	手づく	10YR7/3 に白・黄褐色	1mm以下の白・黒色粒子少量含む	中々軟	四角磁欠損
44210	3	B14	付着層	土師質・土師	6.1	2.5	0.7	27.3	手づく	7.5YR6/4 に白・褐色	1~2mm以下の白・黒色粒子少量含む	中々軟	ほぼ光形
46205	4	D21	SP123	土師質・土師	4.8	1.6	0.6	8.9	手づく	10YR7/2 に白・黄褐色	1mm以下の白色粒子少量含む	中々軟	光形
46205	4	D21	SP123	土師質・土師	5.2	2.4	0.7	21.4	手づく	10YR7/2 に白・黄褐色	1mm以下の白・赤・黒色粒子・チヤート少量含む	中々軟	光形
46206	4	D21	SP123	須恵質・土師	4.7	1.8	0.7	11.8	手づく	BY7/1 灰白色	1mm以下の白・黒色粒子少量含む	中々軟	四角磁欠損
46207	4	D21	SP123(上層付合箱)	土師質・土師	5.3	4.3	1.6	86.6	手づく	7.5Y7/2 灰白色	1mm以下の白色粒子・砂岩等少量含む	中々軟	磁器欠損
46208	4	D20	上層付合箱	土師質・土師	2.6	2.6	0.6	12.4	手づく	10YR5/3 に白・黄褐色	1mm以下の白・黒色粒子少量含む	中々軟	磁器欠損
46207	4	C21	上層付合箱	土師質・土師	2.3	0.6	0.3	0.9	手づく	10YR7/2 に白・黄褐色	微細な黒色粒子少量含む	良	光形
46208	4	B20	上層付合箱	土師質・土師	5.3	1.9	0.7	19.4	手づく	10YR7/3 に白・黄褐色	1mm以下の白・赤・黒色粒子少量含む	中々軟	光形
46209	4	B21	上層付合箱	須恵質・土師	4.1	2.4	0.5	24.3	手づく	5YR7/1 灰白色	1mm以下の白・黒色粒子中量含む	良	光形
46200	4	B20	上層付合箱	土師質・土師	4.2	2.1	0.6	14.5	手づく	10YR7/3 に白・黄褐色	微細な白・黒色粒子少量含む	良	光形
46204	4	B21	上層付合箱	土師質・土師	4.7	2.3	0.7	17.8	手づく	10YR7/2 に白・黄褐色	1mm以下の白・赤・黒色粒子少量含む	中々軟	ほぼ光形
46202	4	B21	上層付合箱	土師質・土師	5.3	2.4	0.7	22.7	手づく	7.5Y7/4 に白・褐色	1mm以下の赤色粒子・長石・石英・チヤート少量含む	中々軟	磁器欠損
46203	4	B21	上層付合箱	須恵質・土師	5.6	2.5	0.8	25.0	手づく	NA/0 灰色	微細な白色粒子少量含む	中々軟	光形
46204	4	D20	上層付合箱	土師質・土師	4.9	2.4	0.9	24.1	手づく	10YR5/3 に白・黄褐色	微細な白・赤色粒子少量含む	中々軟	磁器欠損
46205	4	B21	上層付合箱(市製水)	土師質・土師	6.0	2.1	0.8	18.1	手づく	5YR5/6 に白・黄褐色	微細な白・赤・黒色粒子少量含む	中々軟	ほぼ光形
46206	4	B21	上層付合箱	土師質・土師	5.4	2.3	0.7	24.9	手づく	10YR7/4 に白・黄褐色	1mm以下の白・黒色粒子・長石・石英・砂岩・チヤート少量含む	中々軟	ほぼ光形
46207	4	C21	上層付合箱	土師質・土師	5.3	2.3	0.7	20.3	手づく	10YR7/3 に白・黄褐色	1mm以下の白・赤・黒色粒子少量含む	良	光形
46208	4	B21	上層付合箱	土師質・土師	5.3	2.4	0.7	24.9	手づく	7.5YR6/4 に白・褐色	1mm以下の赤・黄・灰・砂岩少量含む	中々軟	ほぼ光形
46209	4	D20	上層付合箱	土師質・土師	5.9	4.2	1.9	79.8	手づく	10YR7/2 に白・黄褐色	1mm以下の白色粒子少量含む	中々軟	磁器欠損
46210	4	C21	上層付合箱	土師質・土師	6.9	4.6	2.1	111.6	不明	2.5Y/1 灰白色	1mm以下の赤色粒子・チヤート・砂岩少量含む	中々軟	全身的に磨滅
46211	4	D-620	上層付合箱	土師質・土師	7.7	5.4	2.1	193.5	工具の押え	7.5Y7/2 灰白色	1~4mm以下の灰石・石英・砂岩少量含む	中々軟	磨滅
47212	4	A20	下層付合箱	土師質・土師	5.1	2.6	0.8	23.4	手づく	7.5Y7/4 に白・褐色	1mm以下の白・赤色粒子少量含む	中々軟	磁器欠損・脚跡
47214	5	A20	上層付合箱	土師質・土製品	4.5	2.8	0.3	6.1	手づく	7.5Y7/4 に白・褐色	2mm以下の赤色粒子・長石・石英・チヤート少量含む	中々軟	磁器欠損
60206	5	C26	下層付合箱	土師質・土師	3.0	3.2	0.7	24.9	手づく	5YR6/4 に白・褐色	1~3mmの赤色粒子・長石・石英・チヤート少量含む	中々軟	磁器欠損
60209	5	C25	上層付合箱	土師質・土師	4.5	1.8	0.5	9.9	手づく	7.5Y7/4 に白・褐色	1~3mm以下の白・赤色粒子・砂岩中量含む	中々軟	四角磁欠損
60200	5	B24	下層付合箱	土師質・土師	5.3	2.1	0.9	16.7	手づく	10YR8/4 黄褐色	1mm以下の白・赤色粒子多量・微細磨滅含む	中々軟	磁器欠損
60201	5	B25	下層付合箱	土師質・土師	4.5	2.9	0.6	12.7	手づく	10YR7/2 に白・黄褐色	1~2mm以下の白色粒子少量含む	中々軟	磁器欠損
60202	5	D24	下層付合箱	土師質・土師	5.0	2.5	0.9	22.7	手づく	7.5YR6/4 に白・褐色	微細な白・赤・黒色粒子少量含む	中々軟	光形
60203	5	D35	上層付合箱	土師質・土師	4.9	2.5	0.7	26.2	手づく	7.5Y7/3 に白・褐色	1~2mm以下の赤・黒色粒子・長石・石英少量含む	中々軟	光形
60204	5	A26	上層付合箱	土師質・土師	5.3	2.5	0.6	24.6	手づく	10YR7/2 に白・黄褐色	1mm以下の白・黒色粒子中量含む	中々軟	ほぼ光形
60205	5	C14	下層付合箱	土師質・土師	5.4	2.8	0.8	30.2	手づく	10YR6/2 灰白色	1~3mm以下の赤色粒子・長石・石英・砂岩少量含む	中々軟	磨滅・脚跡欠損
60206	5	D34	上層付合箱	土師質・土師	5.6	4.1	1.7	62.7	不明	7.5Y/1 灰白色	1mm以下の白・赤色粒子少量含む	中々軟	磨滅・脚跡欠損
60207	5	B24	下層付合箱	土師質・土師	6.7	4.4	1.5	95.1	手づく	10YR8/2 灰白色	1~3mm以下の赤色粒子・長石・石英多量含む	中々軟	磨滅・脚跡欠損
60208	5	D26	上層付合箱	須恵質・土師	3.9	1.0	0.4	3.8	手づく	NT/1 灰白色	微細な白色粒子少量含む	良	光形

第19表 瓦観察表

検体番号	区	グランド	遺構・部位	種類・部形	残存長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	特徴				備考	
								表	裏	内面	外面		
60206	5	B24	上層付合箱	陶瓦・瓦	6.5	6.7	1.7	ナ	表切のち ナ	裏切のち ナ	2.5Y4/1黄灰 色	7.5YR4/2黄灰色 NA.0灰色の混合	タテ成形

第20表 石器・石製品観察表

検出番号	区	グランド	遺構等	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
43484	3	C19	SR01	磨石	花崗閃緑岩	7.34	2.46	7.61	622.00	
43489	3	P14	SR01	石錘	ホムンブフェルス	2.20	5.17	1.30	53.47	
43490	3	C14	SR01	砥石	砂岩	7.10	5.90	2.68	182.00	砥面4 筋有り
44430	3	D14	包含層	磨石	花崗閃緑岩	7.92	6.68	5.00	398.00	
46444	4	C3	SD16	磨石	砂岩	11.84	4.57	4.07	290.00	
5049138	4	A-B22	上層包含層	磨石	花崗閃緑岩	7.04	6.17	5.96	360.00	
5049139	4	B21	上層包含層	磨石	花崗閃緑岩	10.90	5.96	4.48	468.00	
5049140	4	D-E20	上層包含層	磨製石斧	泥岩	14.80	3.00	1.30	97.36	
5049141	4	D-E20	上層包含層	磨製石斧	砂質ホムンブフェルス	7.08	4.03	1.68	49.72	
5049142	4	B21	上層包含層	砥石	砂岩	15.55	8.80	9.10	137.00	砥面5
53484	4	B29	SD3	磨製石斧	砂岩	11.20	6.90	4.40	594.00	
574928	4	C20	下層包含層	石皿	花崗閃緑岩	17.40	11.80	6.90	218.00	
604997	5	D65	下層包含層	磨石	花崗閃緑岩	8.60	6.50	5.80	480.00	砥行痕有り
604998	5	—	跡土	砥石	珪質粘板岩	10.85	3.90	1.40	85.27	砥面6
604999	5	A-B24	北壁排水溝	砥石	軽石	11.85	6.73	6.55	76.06	筋有り
71495	6	—	SP96	磨製石斧	粘板岩	7.78	5.32	1.13	83.88	刃部再生

第21表 木製品観察表

検出番号	区	グランド	遺構	種類	法量			樹種	備考	
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
34485	2	B20	SR01	井戸枠内	縦向き	27.0	21.4	3.4	スギ科・スギ属	
34486	2	A8-A9	SE01(東辺)	井戸枠(縦板)	縦向き	55.0	35.0	2.6	新板:スギ科・スギ属 磨製樹皮:ヤマザクラ又はカバ	穿孔・焦がし痕
34487	2	A8-A9	SR01(南辺)	井戸枠(縦板)	縦向き	60.2	29.2	2.4	新板:スギ科・スギ属 磨製樹皮:ヤマザクラ又はカバ	穿孔あり
34488	2	A8-A9	SR01(西辺)	井戸枠(縦板)	縦向き	62.6	35.4	2.6	新板:スギ科・スギ属 磨製樹皮:ヤマザクラ又はカバ	穿孔・焦がし痕
34489	2	A8-A9	SR01(北辺)	井戸枠(縦板)	縦向き	53.2	33.8	3.0	新板:スギ科・スギ属 磨製樹皮:ヤマザクラ又はカバ	穿孔・焦がし痕
344910	2	A8-A9	SR01(南東隅)	井戸部材	縦向き	58.2	4.2	2.6	スギ科・スギ属	
344911	2	A8-A9	SR01(南西隅)	井戸部材	縦向き	62.5	6.2	2.6	スギ科・スギ属	
344912	2	A8-A9	SR01(北西隅)	井戸部材	縦向き	60.5	8.0	1.8	スギ科・スギ属	
344913	2	A8-A9	SR01(北西隅・内側)	井戸部材	縦向き	19.8	2.5	1.2	スギ科・スギ属	
40492	3	D15	SP63	木柱	縦向き	50.5	14.2	14.2		上部欠損
40493	3	C16	SP76	木柱	縦向き	37.5	20.5	20.5		上部欠損
40494	3	D14	SP96	加工木	縦向き	12.0	0.7	0.7		上部欠損
40495	3	D14	SP96	木層	縦向き	13.0	2.2	0.3	スギ科・スギ属	黒色
404916	3	D14	SP160	木柱	縦向き	16.5	11.9	8.5		黒色(状態悪い)
43498	3	C15	SD15	加工木	縦向き	83.7	2.4	2.2		欠損
43499	3	B14	SR01	木層	縦向き	13.1	2.6		ツバノ科ツバノ属	
434982	3	B14	SR01	木層	縦向き	12.7	2.1	0.8	スギ科・スギ属	
434983	3	B14	SR01	木層	縦向き	19.2	2.7	0.7	スギ科・スギ属	
434984	3	D14	SR01	動物	縦向き	6.15	縦径(10.2)		ヒノキ科・スノオ属	穿孔あり
434985	3	D13-D14	SR01	底土	縦向き	11.5	11.5	1.0		穿孔あり・木打釘3箇所
434986	3	D14	SR01	底土	縦向き	33.2	17.8	1.4		穿孔あり・木打釘3箇所
434987	3	D13-D14	SR01	加工木	縦向き	25.4	2.0	1.2		上部欠損
444931	3	A14	西壁排水溝	舟形木製品	縦向き	18.9	05.4	5.3	スギ科・スギ属	
444932	3	C14	包含層	部材	縦向き	28.0	2.8	0.9	ヒノキ科・スノオ属	中央部1箇所貫通した穿孔
444933	3	B14	包含層	舟形木製品	縦向き	15.3	4.0	0.6	スギ科・スギ属	
444934	3	C14	包含層	動物	縦向き	3.8	縦径(13.8)		新板:スギ科・スギ属 動物:ヒノキ科・スノオ属	穿孔あり・保存処理前の実 断面を基に復元
444935	3	B14	包含層	加工木	縦向き	28.6	1.7	1.7		
444936	3	D14	包含層	加工木	縦向き	23.6	2.2	2.1		先端欠損
444937	3	B14	包含層	柄杓柄	縦向き	71.2	2.5	2.0		上部部所貫通した穿孔
53486	4	B20	SR03	井戸枠内	容積	縦径(15.4)		4.0	スギ科・スギ属	
53487	4	B20	SE03	井戸枠内	木層	縦径(11.4)	横径(9.8)		ツバノ科・ツバノ属	
54498	4	R20	SR03(東辺)	井戸枠(縦板)	縦向き	78.1	24.0	3.0	スギ科・スギ属	穿孔あり
54499	4	R20	SR03(南辺)	井戸枠(縦板)	縦向き	86.1	27.2	3.4	スギ科・スギ属	穿孔あり
54499	4	R20	SE03(東辺)	井戸枠(縦板)	縦向き	77.0	35.2	4.4	スギ科・スギ属	穿孔あり
544910	4	R20	SR03(北辺)	井戸枠(縦板)	縦向き	82.0	37.4	3.4	スギ科・スギ属	穿孔あり
56497	4	C20	SP244	木柱	縦向き	16.1	22.0	3.7		欠損(状態悪い)
56499	4	C20	SP398	木柱	縦向き	41.2	17.5	17.5		欠損(状態悪い)
564916	4	A-B20	SD22	加工木	縦向き	43.9	2.2	2.3		一次欠損
594922	5	R20	SR01	SP210	木柱	(41.1)	21.5	直径20.3		上部欠損
594924	5	R20	SR01	SP211	木柱	(25.0)	20.3	直径20.3		上部欠損
594925	5	R24-R25	SR01	SP278	木柱	(45.0)	19.0	直径19.6		上部欠損・焦がし痕
594926	5	D24	SR01	SP278	木柱	(36.1)	21.0	直径21.0		上部欠損・焦がし痕
62493	5	R24	SR02(北辺)	井戸枠(転用)	縦向き	40.1	36.6	4.6	スギ科・スギ属	焦がし痕
62494	5	R24	SR02(東辺)	井戸枠(転用)	縦向き	36.1	40.3	4.1	スギ科・スギ属	焦がし痕
64492	5	D26	SP180	木柱	縦向き	(19.8)	7.2	(7.2)		上部欠損
64493	5	D26	SP281	木柱	縦向き	(28.0)	9.0	9.0		上部欠損
64496	5	D24	SP272	木柱	縦向き	(48.5)	24.7	直径24.5		上部欠損
64497	5	D25	SP279	木柱	縦向き	(15.7)	(16.9)	(7.6)		欠損(状態悪い)
6949100	5	R24	下層包含層	棒	縦向き	4.5	1.8	1.7	スギ科・スギ属	
6949101	5	A25	上層包含層	木層	縦向き	(5.7)	1.8	0.3	スギ科・スギ属	黒色

第22表 銭貨観察表

検出番号	区	グランド	層位	種類	銭作(cm)	内径(cm)	銭厚	重量(g)	国名	初铸年	背	備考
304914	1	R2	包含層	成金通貨	2.45	0.7	0.12	2.27	北宋	1111	無	銭書
5649137	4	C20	上層包含層	銀兩通貨	2.3	0.66	0.1	2.62	北宋	1088	無	銭書
6949101	5	D25	上層包含層	寛永通貨	2.3	0.65	0.1	2.78	日本	1697	無	新寛永(5期)